

編 集 後 記

2013年の第2号を発刊する。第1号の編集後記では、馴染みのない分野の論文に対する査読の協力をお願いした。また、最近、検索システムの向上から、大学の紀要に掲載されている論文が読まれている現状をお知らせした。大学の紀要も情報発信のツールとして有用になって来たわけである。論文の投稿に際しては、報告したい内容から雑誌の種類が決まり、次にインパクトファクターが考慮され決定されることが多い。インパクトファクターが高い雑誌では、品質管理のため厳しい査読がある。山形医学の紀要の査読に関しては、医学部の諸先生のご協力を頂き、きちんと施行することが可能である。最近、皆様のご協力により投稿論文が増えつつある。英語で論文を書くことも大変な作業であるが、邦文で論文を書くことも難しい事である。英語では単純に表現できても、邦文できちんと表現することの方が難しいこともある。邦文での表現に関しては、昔と異なり指導を受けることが少なくなっており、また、参考とすべき文章の入手が困難である。論文に使用される文体と日常会話で使用される表現との解離が大きくなってきていることも事実である。そんな状況下に品質管理の面から、不採択となる論文も出てきており、採択まで何度も修正を求められる論文もある。不採択となった投稿者におかれましては、ささやかでもオリジナルな内容を含む論文の作成に努力していただき、一方、修正を求められた投稿者におかれましては、反発ではなく、修正された文章を参考に表現力を研ぎ澄まして頂きたいと願っている。

表現鍛錬の場となることも、医学部紀要の大きな役目かもしれない。

編集委員長（小児科学講座教授） 早 坂 清（2013年7月）